

# 神津島・防長丸遭難者慰霊の旅

大島商船高等専門学校  
同窓会副会長 市川博康

## イ. 神津島の概要

神津島は伊豆七島のひとつで伊豆半島の南にあり、島名の由来は、その昔、事代主命という神様が、島づくりのために神々を集めて相談する拠点としたのが「神集島」であり、そこから神津島と名付けられたと言われている。

島は一村一集落で、約 4k m<sup>2</sup>の地域に平成 26 年 6 月 1 日現在 866 世帯、人口は 1930 人の方々が生活をしている。

島の周囲は一部には綺麗な砂浜が広がっているものの、そのほとんどは断崖絶壁の険しい海岸線となっており、太平洋の荒波が激しく打ち寄せては砕け散っていた。

現在、この島は、主として夏期において、遊泳、サーフィン、釣り、ファミリーキャンプ等で毎年たくさんの人々が訪れる自然豊かな美しい島である。



## ロ. 神津島への慰霊の旅

今般、同窓会を代表して、酒迎会長、古賀事務局長、及び筆者の 3 名が 8 月 7 日～9 日、2 泊 3 日の予定で東京都神津島村を訪れました。

尚、台風 11 号の影響により交通手段である大型客船及びジェットフォイルの欠航が 2 日間続き、実際に島を離れたのは 11 日となった。

### 8 月 7 日

岩国空港から旅は始まり羽田空港へ、当日の 23 時、東海汽船の“さるびあ丸”にて浜松町の竹芝を出港した。

### 8 月 8 日

竹芝を出港の翌朝 0850 時神津島へ入港した。

到着当日の午前中、今回の防長丸の件で大変お世話になった村役場産業観光課主幹の石田さんの案内で神津島村役場を訪れ、石野田村長を表敬訪問、今回の神津島訪問の目的についてお話をし、防長丸の海難記なる銘板を新たに設置していただいたことに対し謝意を表した。

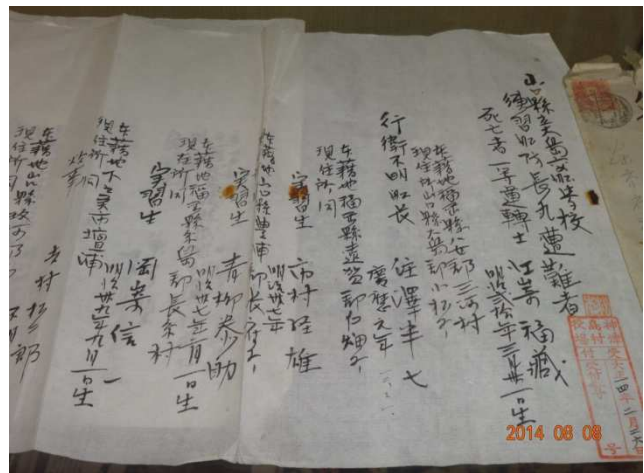
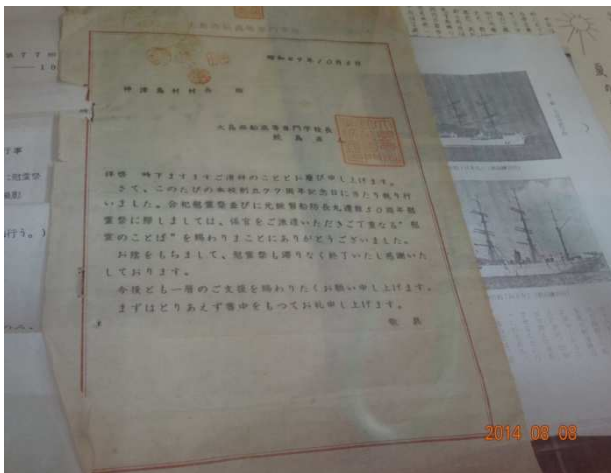
ここ役場では、今まで見たことのない防長丸に関する新たな発見があった。神津島村史には防長丸遭難に関する記述があり、防長丸乗組員の名簿、遭難状況、並びに消防組、在郷軍人会、青年団等、村を挙げての救助作業、更に防長新聞の本件に関する記事、また、山口県内務部から遭難者家族宛の報告などが記載されていた。

その後、神津島村郷土資料館を訪れた。ここには島の文献資料や歴史ある生活用具等が数多く展示されており島の自然、産業、文化遺産等の歴史を見ることができる。

この資料館の2階の一角に防長丸の遭難に関する資料が展示されており、ここでも新たな発見があった。

その中には防長丸の遭難者の詳細な名簿や商船学校創立 77 周年記念日の合祀慰霊祭並びに元練習船防長丸遭難 50 周年慰霊祭にあたり、島から係官が学校へ派遣され丁重なる

“慰霊のこぼ”をいただいたことに対する、当時の鮫島直人校長の村長宛（昭和 49 年 10 月 5 日付）のお礼状等が展示されているなど、貴重な資料が多数存在していた。



午後は同じく村役場産業観光課主幹の石田さんに加え、元村役場産業観光課長の前田さんの案内で島の南東岸にある松山遊歩道を訪れた。

防長丸が座礁・沈没した現場を眼下に見下ろす松山鼻の展望台には、新しい木枠を組んだ架台に“防長丸の海難記”と記された銘板が設置されていた。

年月は既に 89 年が過ぎ去っているが、ここで花束、お線香を手向け、合掌、花束を海へ投下して亡くなった方々のご冥福をお祈りした。

（ここは以前、転落防止用の保護柵のみが設置されており、碧い海と岩礁に荒波が打ち付け白波が無い上がる景観を楽しむだけの展望台であった。）



松山鼻（この沖の岩礁に座礁・沈没した）

長つ崎

今回の神津島訪問の目的はこれで達成したが、その後は前述のお二人に、お忙しい中、島内の名所、史跡等をご案内していただき本当にお世話になりました。



8月9日、8月10日

大型客船、ジェットフォイルともに台風11号の影響で欠航となり前述のご両名の方々には毎日、名所、史跡、観光スポット等を車でご案内していただきました。

おかげさまで名所、史跡、景勝地など一般の観光客では網羅できないような神津島を全て堪能することができました。

8月11日

台風11号が日本海へ去り、幸いにも熱海へ向かうジェットフォイルが運航を再開するとのことで11時35分神津島をあとにした。



## ハ. 神津島訪問の目的

今回の神津島への旅は2013年12月17日、神津島役場産業観光課主幹の石田さんから当校への電話がきっかけとなった。

その電話の内容は防長丸の海難の事実確認、座礁沈没した岩礁のある松山鼻の展望台に史実として“防長丸の海難記”なる銘板を設置することに対する学校側の諒解を確認するというものであった。

2014年3月10日、新しい架台と銘板が設置されたことにより、学校の同窓会として関係者の方々への御礼、並びに遭難により犠牲となられた方々の慰霊のため島を訪れることを決定した。

筆者 古賀事務局長 酒迎会長



## 二. 防長丸海難事故の概要

防長丸は第一船「海平丸」、第二船「山口丸」に続く、第三船として購入された総トン数270トン三本柱のバーケンチン型の帆船で、大正13年3月21日小松港に初入港した。

本船は大正13年5月10日、船長、乗組員及び実習生第25期生16名、総数22名を乗せ東京に向けて処女航海の途についた。

大正13年12月18日午後3時、宇品港に向けて東京を出帆し帰路についたが、その途次である12月26日、逆風のため航海の継続を断念、静岡県妻良港に避難し56日間もの間、順風を待つこととなった。

大正14年2月21日、風向が東南東となり正午同港を出帆し、目的地に向け順調に航海を再開した。

翌22日正午過ぎから北西の疾風となり、夕刻頃には三重県三木崎20哩の地点まで到達していたが、その頃より風向は西風～北西となり、且つ風力が漸次強まり風力は8～9に達した。

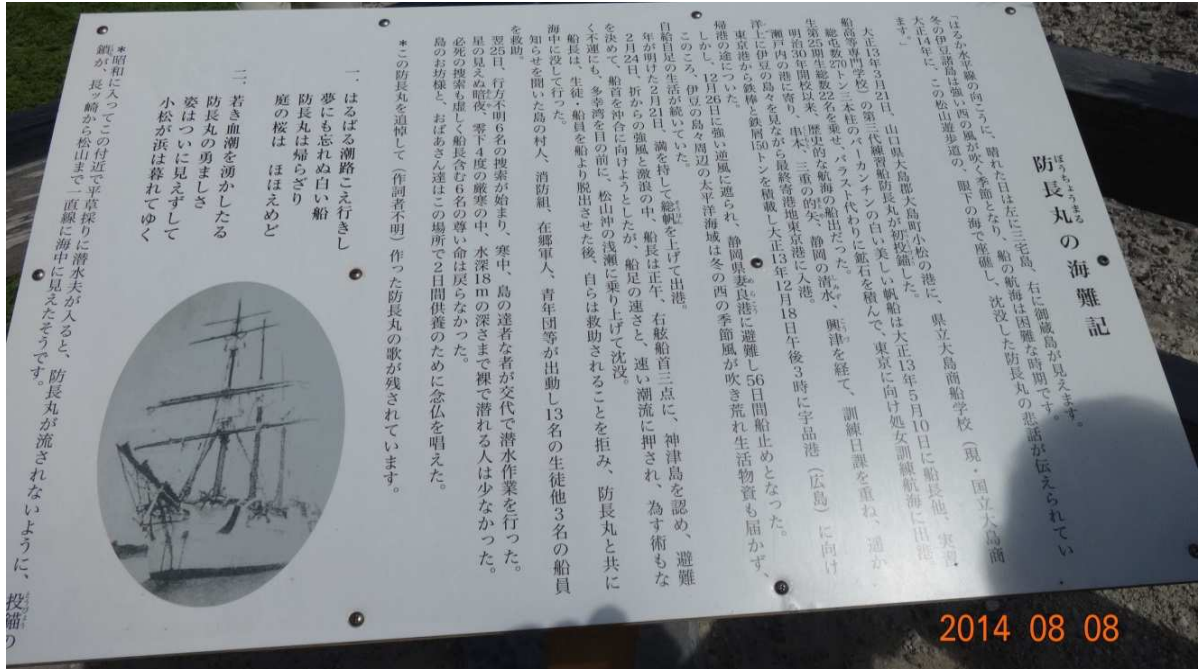
24日正午頃、伊豆神津島を右舷船首3点に認め、その南東岸にある多幸湾に避難することとした。(筆者注：西風と黒潮で東へ大きく流された)

同日午後7時頃、突然風力が弱まって順風となった。船長は島の南東岸の至近距離にあると感じ種々

操船を試みたが叶わず、潮流に押し流され、松山鼻沖の岩礁に乗り揚げ午後7時40分頃沈没した。

乗船していた22名の内、13名の生徒と3名の船員は陸岸に泳ぎ着いて地元の方々に救助されたが、残る6名は行方不明となった。

翌25日には潜水作業を始め、一等運転士、26日に生徒1名、3月1日に船長の遺体が発見されたが、残る3名は行方不明のままである。



松山鼻展望台に新しく設置された防長丸海難記の銘板

## ホ. 後書き

防長丸の遭難に際しては2月という極寒の季節、大時化で零下4度の厳寒の暗夜にも拘らず、消防組・在郷軍人会・青年団等、村を挙げて船員や学生の救助活動にあたり、16名の人命が救助されたこと、また6名の行方不明者等（3名遺体発見、3名行方不明）に対する通夜、供養など手厚い待遇をしていただいたことなど、神津島の人達の温情味溢れる対応には頭が下がり感謝の気持ちを再認識しました。

大正14年3月4日付の防長新聞には“生存者 遭難当時の状況を語る”との記事があり、遭難に至った状況の記述とともに、島の方々の親身な救助活動や死亡者に対する懇切丁寧なる対応など感謝に堪えないものがある。と掲載されている。

更に、防長丸の海難事故に対し長年に亘り関心を持ち続け、調査、史料の収集等を続けてこられ、今回の銘板設置のきっかけを作った元神津島産業観光課長の前田さん、また実際に設置に向けて様々なご尽力をいただいた現神津島産業観光課主幹の石田さんに心からの感謝と御礼を申し上げます。



松山鼻にて、今回の件で大変なご尽力をいただいた前田さん、石田さんと一緒に記念撮影

以上

【編集部より】本稿は、“北から南から”大島商船同窓会の記事として投稿されましたが、「全船協 80周年記念行事の“記念展示パネル”で「公立商船学校練習船」でも紹介した防長丸海難に関する記事で史実として貴重なものであり、「北から南から」と切り離して紹介することにしました。